

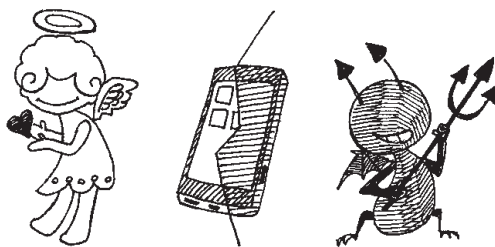
かないところで、10数年前とは比較にならないほど深刻で、危険な子ども世界が張り巡らされている……。

*

これも10数年前のことだが、ある新聞が、「世界に先駆けてインターネットを開発したアメリカの情報機器に関する研究者が、日本はモンキーにマシンガンを持たせたと風刺した。」と報じた。この屈辱的な比喩にはさすがに怒りを覚えた。しかし、この風刺は、スマホの有益性と有害性の判断がつかず、健康被害にも無頓着で、自己責任能力のない子に、接し方によっては非常に危険なスマホを与え、ほとんど無制限に使わせている今日の我が国の実態を言い当てているのではないか……。

*

数ヶ月前、ある中学校の教師が、「子どもにスマホを持たせるかどうかの判断は、もちろん保護者である親御さんが下すものですが、親御さんには、小・中学生にスマホを安易に買ひ与えないでくださいとお願ひしたい……。」と語った。その理由は、学校でメディア・リテラシー（情報を識別し、活用する能力）を育む指導をしても、スマホを恰好の玩具と思



い込んでいる中学生には、校外であろうが休日であろうが、さらには深夜であろうが、その時その場においてマン・ツー・マンで指導しない限り、効果がないからだ。そして、何と非難されようとも、教師（学校）は、インターネット上で起こったトラブルについては、ほとんど手の施しようがないからだ……。

*

子どもの健康と成長に対する実質的な配慮が大幅に立ち遅れている今日のネット社会の問題は、経済効果最優先で、その時点において因果関係は分からないとし、負の情報伏せ、予防や対策を先送りするという点において、かつて直き心の国、日本が繰り返した水俣病や四日市ぜんそく、薬害エイズなどの悲惨な健康被害の問題に酷似しているのではないか……。

内海先生が、次のようなネット依存症の実態やネット社会の怖さを指摘されました。

① メディア漬けの生活によって、読書や運動、会話、睡眠の時間が少なくなっている。特に、睡眠と脳（前頭前野）の発達には密接な関係があるにもかかわらず、日本の子どもの睡眠時間は世界一短い。

② 日本の中高生の約52万人（推定）が「ネット依存」状態で、症状に応じた治療や指導、支援、配慮が必要である。

③ ネット社会には、嘘や甘い誘惑、危険な情報があふれている。

④ 現実の生活ではできないことを、ネット上でつい安直にやってしまった若者が、人生を棒に振るような事件が相次いでいる。一度ネットに出すと、その情報は回収不能で、一生消えないと思わなければならない。

⑤ ゲーム会社は、5千時間熱中できるゲームの開発と販売に躍起になっており、子どもはそれのおもしろさにのみり込み、没頭してしまう。

⑥ オンラインゲームによって、子どもの生活リズムが乱れるケースが多い。スマホの躰アプリもたくさんあるが、「スマホ育児」は、我が子を通して子育ての人体実験しているようなものである。

⑦

このような問題点に対して、内海先生は次のような提言をされました。○思春期における脳の健全な発達のために、電子映像メディアへの接触時間を一日2時間以内にコントロールし、睡眠時間を確保する。読書や運動、手伝

い、家族との対話、屋外の遊びなどもバランスよく行う。

○テレビやスマホに子守りをさせない。

○中学生は、自分のことは自分で考えられるので、将来の自分をイメージして、脳の発達に効果的な活動の優先順位を決め、その優先順位に従って、一日の時間を効率よく使う。

○ネット中毒対策先進国の韓国に学び、子どもの成長を促す視点で、家庭・学校・地域ぐるみの制度及びルールを定め、連携して取り組む。

○判断力と自制心が育つまで、子どもにスマホを買い与えない。

○人や自然と直接交わり、触れ合うことによって、日々、心豊かな生活を送る。

講演後、講師の方への「お礼の言葉」で、羽場雅敏PTA会長が、「立科中学校も決して例外ではなく、今、親の姿勢が問われています。」と言われました。

大人も子どもも、内海裕美先生の提言とPTA会長からのこの呼びかけを重く受け止めるべきかと存じます。スマホを中心とした子どもの電子映像メディア事情は、絶滅危惧種やモンキーにマシンガン……、ネット依存症、ネット中毒、人体実験、子どもの劣化など、およそ子育ての場にはそぐわない言葉が飛び交うほど危機的状況にあるからです。